

「心の道具箱」のカリキュラムは幼少期に自己調整力と学力を向上させる



本レビューの目的

このキャンベル・システマティック・レビューでは、「心の道具箱」が学校で実施されていることを伝えるべく、子どもの自己調整力と学力の促進における「心の道具箱」カリキュラムの有効性を調査している。参加者に含まれる生徒はあらゆる年齢、ジェンダー、エスニシティ、特殊教育の受講状況、言語学習状況、社会経済的状況にわたっている。本レビューでは、アメリカ合衆国において行われた6の研究にわたる14の記録からの調査結果をまとめている。

幼少期の「心の道具箱」カリキュラムは子どもの自己調整力と学力を向上させられると思われる。「心の道具箱」カリキュラムは厳密なエビデンスがないことで妨げられており、この調査結果を裏付けるにはさらなる調査が必要である。

本レビューの研究対象

「心の道具箱」は幼児教育のカリキュラムで、構築されたごっこ遊びのシナリオと他の一連のカリキュラム活動を含んでいる。

「心の道具箱」は、教育の文脈で、自己調整力と他の社会的感情に関する能力の両方に焦点を当てることで、子どもの自己調整力と学力を向上させることを目的としている。本レビューでは、「心のおもちゃ」が学校で実施されていることを伝えるべく、子どもの自己調整力と学力の促進における「心のおもちゃ」の有効性を調査する。

比較対象のカリキュラムと比べて、「おもちゃ」カリキュラムは子どもの算数の学力を向上させた

レビューに含まれる研究

レビューの対象となる研究は、ランダム化比較試験あるいは疑似実験研究であり、自己調整あるいは学力の領域における「道具箱」の有効性に関して1つ以上の定量効果について報告するものであることが条件であった。

本レビューには、6の研究にわたる全部で14の記録が含まれている。参加者に含まれる生徒はあらゆる年齢、ジェンダー、エスニシティ、特殊教育の受講状況、言語学習状況、社会経済的状況にわたっている。対象となる研究においては、4つの主要評価項目のうち少なくとも1つを計測しており、副次評価項目については計測していない。何もしていない状態、あるいは別の介入と「道具箱」を比較する研究が本レビューには含まれている。対象となる研究は全てアメリカ合衆国で行われた。



本レビューの最新度

本レビューの著者は2016年12月までに発表された研究を探した。このキャンベル・システマティック・レビューは2017年10月に発表された。

キャンベル・コラボレーションとは

キャンベル・コラボレーションは、体系的なレビューを発表する、ボランティアによる非営利の国際研究組織である。我々は、社会科学と行動科学におけるプログラムに関するエビデンスを要約し、質を評価している、我々の目的は、人々がよりよい選択と政策決定を行うことを支援することである。

このサマリーについて

このサマリーは、『キャンベル・システマティック・レビュー』2017年12号に掲載されたAlex Baron, Maria Evangelou, Lars-Erik Malmberg, and G.J. Melendez-Torresによる「幼少期における『心のおもちゃ』カリキュラムによる自己調整力の向上」(10.4703/csr.2017.10)に基づき、Ada Chukwudozie (キャンベル・コラボレーション)により作成された。本サマリーはTanya Kristiansen (キャンベル・コラボレーション)により再構成・校正された。本サマリーの作成に対するアメリカ調査協会による経済的支援に関し付記する。



本レビューにおける主要な結果

「道具箱」カリキュラムは、比較対象のカリキュラムと比べて、子どもの算数の能力を大きく向上させた。しかし、効果規模は小さい。エビデンスの質にも欠陥がある。

他の手法と比べて、自己調整と読み書き能力への効果の平均規模では「道具箱」に分があるが、効果は統計的には大きくない。対象となる少数の研究から得られたエビデンスは、他の類似したプログラムで得られたエビデンスとだいたい一致している。しかしやはり、エビデンスは弱い。

アウトカム の計測の結果は統計的には重要なものではなかった。

本レビューにおける調査結果から得られる示唆

概して、「おもちゃ」カリキュラムは子どもの自己調整力と学力を向上させるように思われる。しかし、対象となる一部の研究におけるバイアスの高い危険といった他の方法論的欠陥と同様に、対象となる研究の少なさを考えると、この結論は注意して読まなければならない。

調査結果の妥当性には疑問もあるが、「道具箱」の教育的アプローチは多くの子どもの発達 の理論と一致しているように思われるし、それ自体は認めるべきである。とくに、子どもの自己調整力の促進における「道具箱」の有効性を示すことに焦点を当てた研究について、さらに質の高い調査を行う必要がある。